

三〇

雁のこゑをきゝて、越へにまかりける人を思ひてよめる
凡河内躬恒

春くればかりかへるなり白雲の道行きぶりに言やつてまし

《現代語訳》

雁の鳴く声を聞いて、越の国へ行った人のことを思つて詠んだ(うた)

春が来たので雁が北へ帰るようだ。白雲の中の道を行くその雁に、越に行った人への伝言を頼もうかしら。

《語釈》

○雁：『萬葉』に多出。二六首は秋がほとんど。春の「帰雁」は、極めて少ない。

・家離り旅にしあれば秋風の寒き夕べに雁鳴き渡る(巻七、一一六一)

・燕来る時になりぬと雁がねは国偲ひつつ雲隠れ鳴く(帰雁を見る歌、巻一九、四一四四)

○越：「越前」「越中」「越後」の総称。北陸道。○まかる：「行く」「来」の謙譲表現。上位に相当する所から下るときに用いる。ここでは、天皇

のいる都から地方に下る構図の中で用いられている。『古今集』の論理。

○かへるなり：「なり」はいわゆる「伝聞・推定」だが、ここでは、雁の鳴き声が耳に聞こえるので推定する。「雁」は秋に来て春に北へ帰って行く。

○白雲：『萬葉』に多出。二六首。遠方の雲。・後れ居て我が恋ひをれば白雲のたなびく山を今日か越ゆらむ(巻九、一六八一)

言やつてまし：「こと」は「言葉」。「つて」は「つ」(下二段)の未然形。「まし」は、いわゆる「ためらいのまし」、「これに何を書かまし(枕・跋文)。」ここでは、伝言しようかしら。

古注いずれも、『漢書』『蘇武』の故事を指摘。

《余釈》

躬恒は卑官であった。「古今序」は、その人物の紹介で、「前甲斐少目」とする。「目(サカン)」

とは、地方官の最下位、四等官であった。その親友もまた、同様の世界に身を置いていたと思われ、越の国の地方官として旅立って行ったのであろう。

三一

帰る雁をよめる

伊勢

春霞たつを見すててゆくかりは花なき里にすみやならへる

《現代語訳》

北へ帰る雁を詠んだ(うた)

春霞が立ちこめているのを見捨てて北へ飛び去って行く雁は、花の咲かない国に住み慣れているのだろうか。

《語釈》

○帰る雁：「元永本」「清輔本」等「かへるかり」。「帰雁(キガン)」は『萬葉集』に一例。『凌雲新集』

『和漢朗詠集』—藤原公任九六六—一〇四—「山腰帰雁斜牽帯 水面新虹未展巾」の後に本首。

○春霞：『萬葉』に十八首。・心ぐく思ほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば(巻四、七八九、家持)

○里：『萬葉』に五十首程度見られる。・橘の花散る里に通ひなば山ほととぎす響もさむかも(巻十、一九七八)

○ならへる：四段動詞「ならふ」に完了の助動詞「り」。「ならふ」は、もと「慣る」に継続の「ふ」が付いたもの。雁は北国に住み慣れているのだろうかということ、雁の本籍は北国という認識がある。

《余釈》

本文上の問題として、「帰雁」か「帰る雁」か、という問題がある。定家自筆本は「帰雁」だが、読みはわからない。しかし、表記としても、「帰雁」はもともと漢文脈の世界の言葉であるから、『古今集』の世界では「帰る雁」がふさわしい。

配列としては、「鳥歌群」中の「帰る雁」、この後「鶯・梅」一首を継いで「梅歌群」が展開する。